

(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	新人訪問看護師の初めての在宅での看取り —最期まで病気を受容しなかった患者と家族を多職種で支援した経験を通して—
演者名	主演 愛 1) 土佐林 芳江 1) 金山 衛枝 1) 菅野 寿枝 1) 伊藤 タカ子 2)
所属	1) 訪問看護ステーションもりのみやこ 2) 居宅介護支援事業所もりのみやこ

目的

病院で告知を受け「家にいたい」と望みながら最期まで受容できなかった患者と家族を、多職種が連携し看取りまで支え続けた事例を振り返り今後の学びとしたい。

実践内容

N 氏、女性 80 代。平成 X 年大腸癌再発、肺転移と骨盤転移に伴う左臀部～左下肢痛に対し放射線治療を受け一時的に除痛効果が得られた。「歩きたい。」との N 氏の希望に添うべく訪問リハビリや訪問看護、訪問介護、訪問入浴や福祉用具等各場面に応じて多職種による支援が行われた。N 氏は「再発」を認識しつつも痛みは座骨神経痛、肺転移による呼吸苦は気管支喘息と言いつつ続けた。家族内でも再告知すべきか今のままでよいかで意見が揺れていた。担当看護師自身も対応に苦慮した為に担当者会議で対応の仕方を統一し、家族調整については経験豊富なケアマネが担当した。情報やケアを統一することにより家族とチーム全員の看取りへの意識が共有された。N 氏は最期まで自分の病気を受容できずにいたが家族と有意義な時間を過ごすことにより自分の人生を肯定し沢山の家族の愛情と笑顔に囲まれて安らかに旅立たれた。

実践効果

病状進行に伴う各ステージにおいて各職種が情報収集しながら N 氏とその家族の変化を察知しタイムリーに連携した。専門職としての立場から場面に応じた的確なタイミングでサービスの導入やアプローチを行った。生きる意欲と希望が N 氏自身の支えになり家族も覚悟が出来て最期まで N 氏を支えることが出来た。

考察

訪問看護師としての経験が浅かった当時、自分の緩和ケアのスキル不足の他、N 氏や家族の精神的対応に悩んだが先輩看護師と共にケアをする中で学び進んで行くことができた。多職種がタイムリーに連携しながら絶妙なタイミングで患者、家族へアプローチしてこそ深い支援が可能ということを経験した。今回の事例から学ばせて頂く事ができた。